



2013年11月10日(日) アリベルト・ライマン・オペラ第二弾『リア』を観に、日生劇場へ行ってまいりました。前作『メデア』同様、千秋楽公演です。同行した人類：J.Hは、時々何でもないところで有名人と至近距離遭遇しますが、今回は何と作曲者のライマン氏と鉢合わせしました。本公演のお目当ては、ズバリ、タイトルロールの小森輝彦氏。それからカウンターテナーということで、ちょっと気になるエドガー役：藤木大地氏でした。そして今年も指揮者：下野竜也氏のつむじの後方で指揮を見ていましたが、ブランコのように弧を描いた箇所と、指を1,2,3,4,5と出していくところ、左からグッと音が出た箇所などが印象に残りました。



### ■小森輝彦氏が素晴らしかった

大体歌い手の方は、声に乗ってくるまで少し時間がかかりますが、「音なし、モノログ」から入る重要なパートとはいえ、小森氏の歌は最初からドーンと感情が伝わってきて素晴らしかった。胸の下あたりから生まれて湧き上がってきた血潮が耳の下で燃え、思わず手指(前足の爪)に力が入りました。

特に印象的だったのは、『私は孤独だ』と歌うところ。あそこはまさにこのオペラのクライマックスでしょう。その他、怒りや悲しみが全て心に響き、涙もググッとせり上がってきた場面が何か所かありました。

### ■特に印象に残った歌い手

小森輝彦氏(リア)と峰茂樹氏(グロスター伯)は、演技も声に含まれる感情表現も抜群。身体の内側から出てきている表現だと思いました。この二人が作品の支柱だったと思います。三枝宏次氏(道化)は演技・歌が平均的に整っていました。また藤木大地氏(エドガー)は、弱々しく出発したけれど、あとは表現力があり、「トムは寒いよ」の意味と感情、それ以後見せる意志の強さが充分伝わってきました。このカウンターテナー起用は適材適所です。はっきり言ってこの4人だけが人間の言葉を話していたと感じます。人形じゃなく人間に見えました。小山由美さん(ゴネリル)、宮本益光さん(オルバニー公)大間知覚さん(ケント伯)の安定性と、臼木あいさん(コーディリア)のラストのシーンの感情は良かったけれど、他の殆どの方は言葉ではなく限りなく音に近かった。企みの内心を表す場面では、感情表現にもう少しピリッとした「声色」が出るとよかったです。ただ全体のバランスで、誰がどこまで目立つかが難しいところですが。

### ■物足りなかったところ

リアが荒野をさまようシーン。音楽の迫力は「荒れ果てた大地で激しい風に叩かれる草叢」を想像させて心を駆り立てるのに、舞台にはもわ〜んとのんびりしたスモークが漂う。廻り舞台ではリアが転げまわる。う〜ん。心象風景にしたのでしょうか、歌い手の表現力でカヴァーしたとしても、音楽の印象とは合わない!あれは英国の霧じゃなくて、どうみてもしょぼい煙。本当はリアじゃなくてバックの景色が動いてほしかったけれど、スクリーンじゃないから難しいのでしょうか。スモークを増やして歌い手さんがむせても困るし。それにここで盛り上げすぎたら、おそらく第二部の盛り上がりシーンが死んでしまったことでしょうか。それは第二部を観て感じました。その廻り舞台の使用が効果的だったのは、死へ赴こうとするグロスター伯とエドガーの場面ですが、それでも何となく商品陳列台のマネキンのような気がしないでもなかった。しかしストップ・モーションの立ち位置構成は良かったと思います。でも全体を通して空間場面がモノトーンで構成されていたため、所々でお経が思い浮かびました。最後のシーンは布団上の葬式っぽい。和ふ〜ですね。それからちょっと字幕がずれたのでハラハラしましたが、二つ目くらいで追いついてホッとしました。(T.V.ではあるけれど、舞台では珍しいどころか初めて)

### ■よかった場面

- \*リアとトム(エドガー)のからむ場面
- \*リアとグロスター伯のからむ場面
- \*亡くなったコーディリアを引いてくるリアの場面
- \*シェイクスピアは台詞が長いのですが、早口のように言葉を音に乗せて行く場面が良かった。ああいう曲想、歌い方って難しそうですが、リズムとテンポの融合が美しいですね。

皆様お疲れ様でした。